

2025 年 9 月 7 日 聖霊降臨後第 13 主日 「自分の十字架を担う」

ルカ 14:25-33

1. 弟子となることの厳しさ

今日イエスさまは立て続けに、集まった人たちに向けてとても厳しい言葉を語られました。私はこの御言葉に身が震える思いです。

「父母、妻子、兄弟姉妹を、さらには自分の命をも憎まなければ、わたしの弟子ではありえない。」 Lk.14:26

「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、わたしの弟子ではありえない。」 Lk.14:27

これらの御言葉は、私たちがふだん持っている「家族愛」や「自己保存の本能」に、真っ向から挑みます。ここでいまイエスさまが語ろうとしておられるのは、単なる道德の話ではありません。

「神の国に従うことが、すべてに優先する」 イエスさまはそう教えられます。

2. ルターの「十字架の神学」から

ルターは「栄光の神学」と「十字架の神学」を対比させました。

「栄光の神学」とは、人の力や成功で神を見ようとする態度です。それに対して

「十字架の神学」は、人間の弱さ、苦しみ、敗北のただ中でこそ、神がご自分を現す という逆説を語ります。イエスさまがここで「自分の十字架を背負え」と言われたのは、私たちが力を誇るためではなく、弱さの中に神の真の力が現れることを示すためです。

塔を建てる計算のたとえ、戦いに出る王のたとえも、人が「自分の力で成し遂げようとする愚かさ」を戒めています。人間の知恵や能力ではなく、ただ神の恵みにすべてを委ねること、それが弟子たちの歩みです。

3. ドイツ神秘主義からの光

ゲルハルト・テアシュテーゲンやマイスター・エックハルトなど、ドイツの神秘家たちは「Gelassenheit（ゲラッセンハイト／自己放棄）」という言葉大切にしました。それは「自分を手放し、神にゆだねる」という生き方です。

主の言葉「自分の持ち物を一切捨てないなら、弟子ではありえない」は、まさにこの「自己放棄」を意味します。

自分の所有、欲望、計算、さらには自分の命さえも手放すとき、人は神の愛のうちに真の自由を得るのです。ここで「憎む」と訳された言葉も、単に家族や命を否定することではなく、「神への愛を第一とするがゆえに、相対化される」という意味で理解できます。神秘家たちは「すべてを失うとき、すべてを神のうち

に見出す」と語りました。

4. 弟子の道としての十字架

ルターにとっても、神秘家にとっても、弟子の道は「自己の死」と「神の愛の勝利」を重ね合わせることでした。イエスの言葉は私たちに問いかけます。

「あなたの信仰の土台はどこにあるのか。人の力か、それとも神の恵みか。」

私たちは自分の十字架を背負います。それはけっして苦しみを愛することではなく、神さまが共に苦しみを担ってくださることを信じて歩むということです。

5. 神にすべてを委ねる

戦争、災害、環境汚染など、様々な不安が私たちの社会に満ち溢れています。

そこで私たちは「自分の力で塔を建てる」ような愚かさに陥りがちです。

しかし、ルターの「十字架の神学」と神秘家たちの「自己放棄」は、同じ真理を示します。それは、

人間の力や栄光ではなく、十字架に現れる神さまの力を信じることです。

そのために、まず自分を手放して、ただ神にすべてを委ねることです。

そのとき、私たちは本当に自由となり、真の弟子として歩むことができます。

「自分の十字架を背負ってついて来なさい」

これは重荷の言葉ではなく、神の愛にすべてを委ねて生きる自由への招きです。

私たちはそれぞれ、担うべき何かを与えられて、ここに集められました。教会の

祈りは、私たちにいつもイエス・キリストの十字架を示して下さいます。そして

私たちが担うべき課題を、聖霊が私たちに与えて下さいます。

主を信じて、イエスさまと共に歩んで行きましょう。